

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	38 / 2017 / 20-23 (再編集版)
タイトル	青森の雪
著 者 名	五十嵐 正俊

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

青 森 の 雪

第3代 五十嵐正俊

まえがき

青森市に住むからには冬の雪の多少で一喜一憂の世界へと引き込まれてしまう。若いうちはスキーに興じ、雪質や各スキー場の積雪情報が気になるが、加齢とともに毎朝の積雪具合が気になってくる。

風除室から積雪の具合を見て、大雪だったりするとガッカリである。家を設計する段階でもう少し雪の積もり方まで考慮すべきだったのだが、青森市から遠く離れた場所に住んでいたので実感が薄れていた。定年退職後生まれ故郷に舞い戻ったものの、まず問題になったのは除雪問題だった。

たまたま立地環境が段々地形で1段下に空地があり、除雪作業はスノーダンプで運び、約3mの落差がある下の空き地にポンと捨てれば良かった。しかし、屋根の構造に一部小屋根をつくったために小屋根に溜まった雪が滑り落ちて、軒下に圧縮された雪が盛り上がるのでそれらの除雪作業は不可欠の仕事になってしまった。もちろん積雪の量にもよるのだが30cm程度も積もった大雪の後には老化の進んだ昨今では相当の重労働になっている。

風除室から道路まで5mほどの距離(幅は車の幅分)もあるので、これら全ての除雪面積は一般家庭に比べればかなりの広さになっている。もちろん体力が無くなったときのために一部にはロードヒーティングの施工もしてあるのだが灯油代を考えれば安易に「スイッチ・オン」とはならず老骨にムチ打ってスノーダンプで運ぶことになっている。

青森市の雪の記録

青森市の雪の記録については「積算降雪量・最深積雪比較—明治30年～平成27年度～」という記録がある。その記録によると青森市で最も雪が多かったのは昭和19年度(1944年度)である。私はこの年、小学校(国民学校)6年生だったのでかなり鮮明に記憶している。記録によれば積算降雪量は1493cm、最深積雪高は209cm(1945.02.21)となっている。この時代は除雪車など無かった時代で、住宅密集地では屋根の雪下ろしの場所がなく、我が家の様な平屋の場合、雪圧で軒先が折れ曲がるのを防ぐため屋根掘りや窓掘りで凌いでいた。小路では電線を跨いで歩き、2階のある家では2階から出入りしていた。

上記の記録によれば降雪量が1000cmを超えたのは明治30年以来2016年まで18回記録されており、そのうちでも1944年度の記録が最も多雪の記録となっている。1945年4月以降、私は青森を離れているが融雪洪水も起きたと聞いている。

平成以降(私が現在地に家を建てて以来)積算降雪量が1000cm(10m)を超えたのは3回あり、3m下の空き地もほぼ満杯に近く、空地の隣の住民から「もう限界だ!」との声もあり、仕方がないので家の前の空き地にも盛り上げたのだった(家の前一面3mほどの雪山が出来上がってしまった)。

逆に今年(2016年度)の様に少なかった記録(積算降雪量500cm以下)を見ると18回しかなく、最も少なかったのは明治36年(1902年)の279cm、最深積雪高49cmとある。これらの記録に比較しても2016年度の雪の降り方は2月末までは相当異例の小雪記録かと思われたのだった。

今年度(2016年度)の初雪は11月9日に記録され、12月15日には日降雪量29cmの大雪があり、そして一時は最高積雪深43cmに達し根雪になったとさえ思われた。しかし、その後は気温の高い日や雨の日もあっさり消えてしまった。

年が明けて2017年になっても大雪らしい大雪が無く経過して2月末でも累積降雪量は403cm(20170226現在)に過ぎなかった。今後3月中に1mほどの降雪量があるかも知れないが、それでも合計降雪量500cm程度に過ぎないと思われる。

明治30年以来3月に入ってから最高積雪を記録した年は24回もあるが、どうやら今シーズンも3月7日以来の冬に逆戻りしたような降雪が続く、2004年以来13年ぶりに3月中の最高積雪深を記録(3月9日:56cm)となったのである。

明治30年以降120年間の記録で、累積降雪量が500cm以下の少雪年は15回記録されているが、今シーズン(2016年度)の累積降雪量は463cm(20170314現在)で明治30年(1897年)以来の少雪記録10位前後の仲間入りはほぼ確実と思われる。

二つ玉低気圧

青森市に猛吹雪をもたらす気圧配置に日本海に発生する低気圧と本州南岸に発生する「二つ玉低気圧」というのがある。日本海に発生する低気圧と南岸低気圧が発達しながら通過して北海道の東で一つに合体する場合である。

この時、青森市はいわゆる暖気で雨が降ったりする。ところが「雨返し」と言われる風雪に見舞われることがある。中学生の頃、国道4号線を西に向かって帰るのだが風に向かって吐息ができない場合もあった。

記録に名高い「八甲田雪中行軍」の悲劇はこのような状況だったと想像できる。寒中には珍しい暖気の中、歩兵第5連隊の兵士たちは「ルンルン気分」で筒井の兵舎を後にしたと思われる。ところが、田茂木野の最後の集落を通過するころから西風が強くなり、馬立場の吹きさらしの尾根部分では猛烈な風雪模様に激変したのであった。

この発達しながら通過する低気圧は北海道の東で停滞気味に通過すると猛吹雪が3日位継続する場合もある。こんな天候の場合家に閉じこもっていれば問題はないのだが、勤務や通学関係で出かけざるを得ない場合もあるだろう。

列車もバスも遅延し定刻にバス停に立っても10分以上も遅れることがあり吹きさらしのバス停で何時到着するか分らないバスを待つのは辛いものである。

この「雨返し」の猛吹雪を実感した記憶がある。当時、私どもの研究室は新城苗畑(現新城中央小学校)に実験室が新築されて我々は青森市内から列車またはバスで新城まで通勤していた。朝普通の状態で実験室に入り、日常の仕事に就いていた。

ところが、10時過ぎ辺りから風雪模様になり、実験室の周りにはあっという間に吹き溜まりが形成され、帰宅時には玄関前に胸の高さに近い雪の壁が形成されていた。僅か数十メートル先には青森営林署新城苗畑主任の宿舎があり、実験室の鍵を預かって帰るのだが途中にある作業員休憩所などの建物がある関係で、雪の壁が数か所形成されていたのである。この様な吹雪になれば、列車もバスも運休である。まともな状態で青森まで帰れそうにはなかった。

たまたま、私と1年先輩のY氏とは毎日の様に近くの斜面でスキーの練習をやっていたのでスキーを履いて帰るのは問題なかったが、全くスキーなどとは無縁の上司のKさんにもスキーを履いてもらっ

て3人でどうにか吹雪の中を数回転びながらどうにか青森までたどり着いたのであった。

しかし、一見二つ玉低気圧発生のように見える場合でも合体が不発に終わる場合も少なくない。2017年2月10日前後の西日本に大雪をもたらした場合などがそうである。

寒波の張り出し方が西日本側に偏ったため山陰地方では大雪になったものの、青森では日本海側の低気圧の移動が遅れたため、合体に至らず青森地方では発達した低気圧と日本海に残された低気圧の間で風速は相殺された形で小雪が舞った程度になったのである。

春の淡雪

3月になって路面も乾いてから時々数cm程度の雪が積もることがある。その多くはいわゆる「春の淡雪」で若干迷惑な場合もあるが比較的早く消えてしまう。

「暑さ寒さも彼岸まで」という言葉があり、「暑い暑いと言っていた夏の暑さも、除雪に明け暮れた雪の季節も秋分や春分を境に過ごしやすい季節と変わっていく。

3月中旬ともなれば、青森市では一段と春の気配が感じられ、積雪量は日増しに減少していく。陽だまりの斜面では残雪が斑模様になり、枯葉の覗いた場所では「コモリグモ」の類が走り回り、成虫越冬した「キタテハ」など「タテハチョウ」の仲間が現れたりする。氷の融けた池の中では水の底で越冬から覚めた「ヤマアカガエル」の産卵が初見されるのもこの頃である。

しかし、時には春の彼岸過ぎでも新城のゲレンデでスキーができた頃(1955年度?)、20cm近い「パウダースノー」が積もり、新雪の感触を楽しんだこともあった。

また、青森市で最後に降雪が観測されるのは普通4月中で、稀に3月に記録される場合もあれば5月に入っても降雪が記録される場合もある。

南岸低気圧

立春も過ぎて「サクラ」の開花予想などが発表され、そろそろ春の気配も感じられる頃、「南岸低気圧」と云うのがやってくる。青森市内にはほとんど影響はないのだが、関東地方から東北地方東部には季節外れのドカ雪が降ることもある。

シベリアから張り出した高気圧が移動性高気圧になって北海道付近を通過した場合など南岸低気圧が急速に発達して本州東岸を北上する場合である。このような場合、関東から本州東岸では猛烈な風雪に見舞われるのである。北海道東部では車が雪に埋まり車を捨てて退避したものの、倉庫に入らず、子供をかばった父親が凍死したという悲しい事故も発生したことがある。

東京では満開の「サクラ」が雪を被り、その後の寒波で道路脇に数日間雪が残っていたこともあった(1958年3月29日:7cmの積雪記録、東京目黒に滞在中)。

このような気圧配置では青森では高気圧に覆われて晴れ間も出て雪解けが進むのだが、関東方面の人たちが慣れない足取りで雪道にスリップしで転んだりする風景をテレビの画面で眺めることになる。

2016年度の雪の降り方

普通青森市では11月中に初雪があり、数回の積雪が記録された後本格的な根雪の季節に移行する。最近では気象庁に各種の統計資料がデータベース化されており何時でも誰でもネット環境の整備されているパソコンからアクセスすることが可能になっている。

今シーズンの青森市の場合、稀に見る少雪の傾向が続き、2月末の積雪は32cm、累積降雪量は400cm程度に過ぎなかった。それで雪の記録を検索してみた。

前述の様に、今シーズン初雪が記録されたのは2016.11.09で積雪4cmが記録されている。その後22日から連続4日間の降雪があり、積雪は一時15cmに達し、さらに12月に入って6日からの本格的な積雪期を迎えて17日までの降雪量は86cmに達し、ほとんど根雪になったと思われた。積雪も16日には43cmを記録していた。ところがその後は最高気温が+に転じ最高気温8℃以上の日が続き23日には最高気温11.2℃を記録し、暮れも押し迫った26日には根雪と思われていた市内の積雪は再びゼロになったのであった。

しかし、年末寒波の影響もあり14cmの積雪量で2017年を迎えたのであった。その後も西高東低の冬型の気圧配置にはなっても風の向きが津軽半島の陰になったためか大雪にはならず日降雪量は2016年12月15日の29cmが今シーズン最大の大雪の記録となって立春も過ぎ、3月に入ったのだったが、どうしたことか、日本海に発生した低気圧が青森県の上を通過し、同時に寒気を呼び込み3月には珍しい真冬型の気圧配置が続いた。

このため、3月3日から連続8日間の降雪となりこの間の合計降雪量は60cmで、3月9日には最深積雪深56cmを記録した。今シーズンの累積降雪量は例年に比較すればまだ少ないものの469cmになっている。それでも明治30年以来の記録では500cm以下の小雪年には入る様であるが、3月に入ってから「春の淡雪」としては度を越すような寒の戻りにはガッカリである。はたして「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通りになるのかどうか……

2017年最後の雪は、4月13日朝で新城では一瞬家の周りが真っ白になったが、記録上では積雪にならなかった。

参考資料:積算降雪量・最深積雪比較表(青森市) 明治30年から平成27年度
気象庁:各種データ資料(青森) 2016—2017

(2017.04.14)